

〈書評〉

三部倫子著

『カムアウトする親子
——同性愛と家族の社会学』

(御茶の水書房 2014年 276頁 ISBN 978-4-275-01075-9 3,600円+税)

佐藤 美和 (本学大学院研究院研究員)



『カムアウトする親子』と題された本書は、異性愛規範社会においてスティグマを押されるセクシュアルマイノリティであることを親にカムアウトする子どもと、子どもからカムアウトされた親、その双方の語りから、親子が同性愛と家族をめぐる問題経験とどのように向き合い対処しているのかを明らかにしようとしている。日本においてはセクシュアルマイノリティに関する研究自体が少ない中で、「親子」という新しい視点を設定し、さらに長期間にわたる質的調査による実証研究の成果である本書は、こうした問題に関心がある研究者や学生にとって貴重かつ重要な一冊となることは言うまでもない。

本書は元となる博士論文に大幅に手を入れ、より幅広い読者を想定したものだが、研究の端緒となったのは、著者が研究発表の場や私的な会話の中で接してきた、「同性愛の人たちって、親に認めて欲しいと思っているんですね。(中略) 意外に保守的だと感じました。」(p. i)、「親なんだから、自分の子どものことは分かってあげられるはずでしょう。」(p. ii) など、一見素朴とも思える言葉だ。これらに対して著者は、日本社会で「カムアウトする親子」となった当事者たちが抱える苦悩の出処や解決がなぜ個人に帰せられるのかということに疑問を呈し、「かれらの抱える生きづらさの原因は、社会のなかにあるのではないか。日本社会に生きる人たちの多くは、ただそれを知らない——知ろうとしない——だけではないか」(p. iii) と厳しく問い返している。

こうした問題意識のもと、本書は一貫して、「理解」をめぐる相互行為に光を当てているといえるだろう。異質な他者をどのように理解するのか、あるいは理解できないとしてどのように共生していくのかという問題は、マイノリティをめぐる研究において繰り返し問われている。多文化主義の台頭以降、人種、民族などにおけるマイノリティの社会的排除に対する異議申し立てに関わる研究が蓄積される中で、他者理解をめぐるのは、それがどのように可能になるのか、そもそも「理解」とはどのような事態なのか、他者を完全に「理解」ということがありうるのか、といった議論がなされてきている。このような議論は、マイノリティに対する「承認」や「寛容」といった概念とも関連しながら、そこに不可避的に横たわるマジョリティとマイノリティの非対称性を問題化してきた。従来の多くの議論はおもに国家や社会におけるマイノリティへの理解やそこでの共生の問題に取り組んでいる。それでは、家族の中に異質な他者が立ち現れた時、そこにはどのような問題が起こるのだろうか。本書において著者は、親子間におけるカミングアウトを契機として、「理解」をめぐる葛藤がどのように生じ対処されているのかを明らかにしようとしている。その際、当事者の具体的な語りを対象としながらも、「スティグマ」に着目することで、当事者が置かれた社会状況や当事者に対して向けられる「社会のまなざし」との関連を抽出し論証している。

第Ⅰ部では、LGB（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル）と異性愛の定位家族を対置してきた先行研究を批判的に検討している。従来の視座は、定位家族の抑圧面を強調し、異性愛の定位家族から「選り取る家族」への移行を描いてきたが、その後の研究ではこうした二項対立には疑問が投げかけられている。英語圏の先行研究をふまえた上で、同性間パートナーシップに法制度による保障のない日本においては、「LGBが生活での危機的状況において、定位家族に依存せざるをえない」（p.11）現状があることが示される。ここで著者は従来の二項対立的な視座ではなく、「異性愛家族を生きる人間としてLGBを捉え」（p.11）る必要性を訴える。その際に生起する現象を見るために「定位家族のなかにLGBが『いる』ことに『気付く』契機」（p.11）としてのカミングアウトという行為を検討する。著者はカミングアウトを、する側だけではなく受け手側も含めた相互行為として捉え、特にそれが親子関係の中でおこなわれる場合にはスティグマに着目するべきことを論じる。

第Ⅱ部では、まずLGBへのインタビューデータから、LGBが異性愛者との間に「可視性をめぐるジレンマ」（p.53）を経験し、否定的な異性愛者像を抱いていることを析出する。さらにセルフヘルプグループであるot会への参与観察データから、対面的相互行為を経て観察されるLGBと異性愛者の関係性の変容を記述している。

次に、子どもの視点に沿って異性愛者の親へのカミングアウトをめぐる経験をインタビューデータから検討する。著者は、LGBは「親に理解して欲しかったからカムアウトした」と語り、また「親に理解されないのでカムアウトしない」と語ることに着目し、親へのカミングアウトに込める意味についての語りの多くは親からの「理解」をめぐるものであることを指摘する（p.70）。そしてLGBが親に対して求める「理解」とは、「性的指向という『性』」と「同性パートナーとの共同生活という『生』」への二重の理解だとまとめている（pp.74-75）。さらに、家族の代替不可能性が強調され、親からの承認の有無が自己やカップルとしての生活を揺り動かすことになる事例が示される。

第Ⅲ部では、子どもにカムアウトされた親へのインタビューをもとに、カミングアウトをどのように受け止めたのか、性的指向の理解をめぐる葛藤と対処、親がどのように認識を変容させたのか、そして「LGBの子どもの親」として自己を認識するようになった親の「縁者のスティグマ」（p.152）を分析している。カムアウトされた親は、親だからこそ子どもを理解しなくてはならないという気持ちと、親であるからこそ子どもの性を理解できない気持ちの板挟みになる事例が示される。次に親の認識変容の過程を順に追い、自分の子どもがLGBだと認識した親は、他者との相互行為を通して「LGBの子がいる親」として「縁者のスティグマ者」となることを示す。親たちは、「異性愛規範社会のなかで生きづらさを感じながらも、他者からの援助を得にくい」（p.196）というLGBと同様の状況に置かれ、個人的努力で縁者のスティグマに対処することになる。

さらに、子どもに対して両義的な立場にある親のサポートを目的に設立されたセルフヘルプグループ「虹の会」への参与観察データから、異性愛者の「親参加者」とセクシュアルマイノリティの「子参加者」との間に形成される「疑似親子」関係を中心に考察がなされている。著者はこうした関係性もつ力に言及し、「スティグマが消える、一瞬だが確かな契機を見いだすことができる」（pp.241-242）と記している。

著者は最後に、「私たちは、差異ある他者とともにどう生きていけるだろうか」、「理解できないから関係性を断つのか、理解できなければ友人や家族関係を続けられないのか」（pp.252-253）と、読者へ、そして自らへと問いを投げかけて本書を結んでいる。

以上みてきたように、カムアウトする子ども、カムアウトされた親という双方の視点からの語りを交差させ、さらに当事者の苦悩を個人に帰することなく社会学的視座から検討していることは、本書がもつ意義として挙げられる。そもそも「カミングアウト」とは「coming out of the closet」、つまり抑圧されクローゼットの中にいる状態から脱しようという、1970年代初頭にアメリカを中心に展開されたゲイ・リベレーションにおける概念である（アルトマン 1971=2010）。それは、アイデンティティを自己肯定し他者へ開示することのみならず、抑圧のない社会への変革を意図したより公的で政治的な行為として提唱された。さらにその実践は異性愛規範への「抵抗」の行為でもある（風間 2002）。しかしLGBに対する抑圧が不可視化されている日本社会では、カミングアウトがもつ政治性や、それがもたらす葛藤が理解されづらい状況にあるといえる。それに対して本書は、親子という視点からカミングアウトをめぐる語りを丁寧に描き出すことで、カミングアウトがもたらす葛藤の背後に、LGBにスティグマを付与する社会の問題が存在することを析出している。

同性婚をめぐる法的問題を研究する評者の関心からは、現在の日本社会において同性間パートナーシップに対して制度的保障がないことが、「カムアウトする親子」が抱える葛藤の一つの社会的要因となっていることを明らかにした点が興味深い。近代家族制度から疎外された存在であるLGBからの家族へのカミングアウトは、それが異性愛規範への抵抗でもある以上、家族に危機をもたらす行為でもある。一方で、カムアウトする子どもは親の理解を求め、その理解の有無に自らの生活／人生が左右される脆弱な状況に置かれている。このようにLGBは、心理的にも社会的にもさまざまな場面で「理解」をめぐる引き裂かれている。社会から疎外されているが故に、自らの「性」と「生」への二重の理解を求める切実な承認要求が存在することが描き出される4章は特に印象深い。本書でも説明されている通り、LGBはカムアウトしない限りマイノリティであるとは認識されない、つまりマジョリティ＝異性愛者としてパッシングする可能性に開かれているという特徴がある。このパッシングを放棄する——スティグマを付与され、家族に問題経験をもたらす——行為でもあるカミングアウトをする／しない背景に、こうした代替不可能な家族に対する「理解」への希求が存在するということは非常に説得的である。日本ではまだ同性間パートナーシップに関する研究は数少ないが、今後必要とされる具体的な議論にとって著者の研究が与える示唆は大きいだろう。

[参考文献]

- Altman, Dennis. *Homosexual: Oppression and Liberation*. New York: Avon Books, 1971. (デニス・アルトマン『ゲイ・アイデンティティ——抑圧と解放』岡島克樹・河口和也・風間孝訳、岩波書店、2010年)。
 風間孝「カミングアウトのポリティクス」『社会学評論』第3号（通巻53号）(2002):pp. 348-364.

(さとう・みわ／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科研究院研究員)